

蕪崎の中高生に、第三の居場所を。

「あなたは何に進化する？」— Miacis(ミアキス)—

蕪崎の駅前に昨年秋、全国的にも珍しい「中高生支援」のための施設が生まれた…

蕪崎市民交流センター NICORI の地下に設えられたおしゃれな空間には、和気あいあいと卓球やカードゲームに興じる子供たち、また一人静かに PC で作業する子供、楽しそうにスタッフの方と談笑する子供の姿がありました。

--- ミアキスは中高生の第三の居場所。自由な空間。学校でも家庭でもなく、地域で安心して過ごせる場所です。何をして過ごすかは自分次第。中高生の主体性を尊重します。本物の無垢の木材のみを使い作ったカウンターや机、自然素材の塗料、ひとつひとつ違う個性を持つ椅子。長く使うほど深い味わいが出てくるものにこだわり、ここにも進化していくという意味が込められています。あえて天井の構造を見せたり、アフリカ原産の奇妙な植物を揃えたりと、中高生の好奇心や感覚をくすぐるきっかけを施しています。空間作りにも中高生の意見を取り入れ、日々「進化」させています。-----



こんな素敵な心配りをもって子どもたちと向き合うスタッフさんたちは、いったいどんな方々なのか…そして実際の中高生の反応は？施設長の西田遙さん（25 歳）に、インタビューしてきました。

——この空間とてもステキですね。おしゃれで、居心地がよくて。ありがとうございます。同じ空間に私たちのオフィスもありますが、垣根を作らず、自由な雰囲気大切にしていって、子どもたちと自然に触れ合えます。スタッフは4名、インターンが1名ですが、中高生に近い20代が中心です。「大のオトナ」と「年の近いオトナ」では子供たちの接し方も違うし打ち解けるのも早いように思います。

——「ミアキス」はどのような背景で生まれたのでしょうか。

全国的にもそうですが、ここ蕪崎でも、これまでも子供向けの福祉、高齢者向けの行政支援は行われてきました。ところが13～18歳、中高生をターゲットとした支援はなく、学校・家庭任せとなっていました。では地域における子供たちの居場所は？このあたりはゲームセンターやボーリング場はなく、彼らの遊び場、集う場所と言えば近隣のカラオケボックスかショッピングモール…という現状でした。もう少し何とか、地域と子供たちをつなぐいい場づくりをしたい、という想いがあったのです。

——西田さんご自身が、この活動を始めた経緯をお聞かせいただけますか。

僕は地元の蕪崎高校を卒業後、山梨大学教育学部に進み、野外教育などを学びました。在学中に「プロジェクトデザイン」という、社会的な課題を解決してゆく会社を起業しました。民宿をシェアハウスにカスタマイズしたり、耕作放棄地を醸造用ワインのブドウ畑にしたり、北杜市の新規就農者を地元の先輩農家さん達とつなげたり…様々なプロジェクトを3ヶ月～1年ほどサポートした後は、個人事業主として独立してもらった。そしてまた次のプロジェクトへ…こういった仕事と並行して自分の生きる場所を求め、北欧などの海外を旅していました。いいところもたくさんあったのですが、地元の蕪崎、山梨の良さを見つめ直し、「やるなら地元でやろう」という気持ちが固まっていきました。ここには1000m級の山があり、国立公園の中にあり、川もある。いい環境です。ここで、バラバラの単発のプロジェクトではなく、ひとつ柱となる経験やその成果を積み重ねてゆける事をしたい。私の父は大工で職人でしたが、自分は教育でやってみよう。



——その想いがミアキスの誕生につながっていったのですね。

ちょうど時を同じくして出会った4人の蒔崎人と1人の若者の5人で、「河原部社」を立ち上げました。河原部社の目的は「蒔崎市を舞台に、小中高生及び20代の若者の支援・育成を通し、蒔崎という地元を大切に作る心の醸成を図るとともに、地域活性の原動力となる若者がいきいきと活躍する社会の実現」です。そして蒔崎市に

「にらさき愛育成 come back 支援プロジェクト」を提案しました。

子供たちにまず蒔崎をもっと好きになってほしい。

地域の課題も知ってほしい。

そうしたら大きくなって市外に出ても、そこでその解決法を学んで、

問題解決のために戻って来るくらいになってほしい。そんな「にらさき愛」を育みたい…。蒔崎市にとっても、若者の人口流出を防ぎたいという願いは切実でしたので、結果、私たちの提案は受け入れてもらえました。



教育の課題もあります。2020年に、文部科学省によって、教育大改革が行われる予定です。かつて行われたゆとり教育は、「生きる力」を育むため、教科の時間を減らし、そこに「総合的な学習の時間」を当て、教科の枠を超えた、生きた学びの時間を作ろうとしました。しかしこれは現場の先生のスキルややる気に依るところが大きく、これによって内容にも大きく差が出ます。結果、現場の負担も大きくなり、近年はその部分を地域に担ってもらい、より豊かで幅広い学びにつなげようという流れに変わりました。「地域に開かれた教育」です。今の中学二年生が大学受験をする年からは、センター試験が記述式になり、教科や分野を越えた学びや高校時代に得た知識や体験を自分なりに表現することも評価の対象になります。そうすれば、家庭環境の違いによって子供の経験値の差も出るでしょう。そこで地域ができることは何でしょう？ミアキスは子供たちの価値観や視野を広げ自ら望む多様な経験を得られる「場づくり」の役目を担いたいと考えています。それが学校でも家でもない、「第三の居場所」です。ところで、最近「社会が学校化している」と感じたことはありませんか？

——「社会の学校化」ですか…西田さんはしばしば、そうお感じになりますか？

はい。昔に比べて、社会に学校的な答えが用意されているような感覚です。行政が子供や若者に投げかけるイベントなどでも、最初からゴールが決まっていて、そこに到達することが目的であるような印象を受けます。そこでは協調性が重んじられ、「流れに逆らうような、真反対の意見は言わない」という規範のようなものがありますし、常に集団化している＝ひとりで何かしない、というムードもあります。学校教育は目指すゴールがあってもいいんです。特に公立学校は、「日本の子どもをこう育てよう」という方針のもとにカリキュラムが組まれていく。しかし地域が同じスタンスでいる必要はありません。地域の環境は様々で、そこに生きる人々の価値観も多様で、どちらも正しい真反対の意見がふつかることもある。大人たちは自分の中に自分だけの「哲学」を持っている。そういった目線で見ると、社会は本当におもしろい。なのに多くの子供たちは、社会を知らないまま進路を選んでいる現状です。どんな社会に出ていくための大学なのか？それが見えない状態で、受験勉強に追われています。私たちは、「子供たちが本当に求めていること、子供たちが内に秘めているものを知りたい。本音の対話をして、彼らと信頼関係を築きたい」と願っています。それには彼らを「中高生」とひとくくりにしてしまうのではなく、一人一人と向き合い、丁寧に様子を探っていく必要があります。ミアキスのスタッフの人選も、子供たちのやることに口を出さず、耳を傾け、話し相手になれるような人を選んでいきます。子供たちに「ここでは何でも言っているんだな」とまず思ってもらいたい。

——こちらでは、子供たち自身がプロジェクトを企画して実現していく、という活動をされているんですね。

そうですね。中高生には、「ここを自由に活用して、やりたいことをしていいんだよ」と伝えています。そう言われても、初めは「やりたいこと」なんて思い浮かびません。そんな発想がないからです。しかし放課後や休日に

足を運ぶうちに、「ここで、こんなことやってみたい」と思いつく子が出てくる。それがプロジェクトに発展していきます。大人のお仕着せで何かやらせるのではなく、適度な刺激は与えつつ、子供自身が心から「やってみたい」と言い出すのを待つのです。

——子供たちの企画は発想が自由で面白そうですね。

そうですね、イベント企画にしても、巷によくある「大人が伝えたいこと」ではなく「子供が自ら求めること」ですから、大人が考えたものより参加者（中高生）が集まります。例えば、数学の定理についての講座を行うとします。子供たちは「この定理を使って問題を解く」という事にはあまり興味がなく、それよりも、そもそも「この時代背景で、どのような人によってなぜこの定理が発見されたのか」という話の方が面白い。そこを知ることによって興味がますます発展して学びがもっと面白くなる。「そもそも」を知る面白さを知って、子供がさらに勝手に進んでいきたくなるような学びの場を作りたいと考えています。先日にも、子供たちが企画した球技大会がありました。25名も集まり、通常ルール、特別ルールでの球技のほか、腕相撲やミニゲームも飛び出し、楽しくて元気いっぱいの時間になりました。



——M I A C I S内の、手作り風の小屋、ひときわ目立ちますが、これも、子どもたちによるものですか？



はい、昨年、冬、「ここに掘りごたつが欲しい」と言い出した子と、「ここでスムージー屋をやりたい」と言う子がいて、2人で大工さんに教えてもらいながら作りました。

掘りごたつ構想は途中で消え、スムージーも保健所の販売許可はもらえなかったため、イベントで無料配布することになりましたが、知り合いのおじいちゃんの栽培したブルーベリーをもらって、それを使いとてもおいしいスムージーとなり、評判は上々でした。

「次は商店街で販売してみる？」などの次の可能性も見えたりして、いい経験になったと思います。他にも、子供たちが自らこのミアキスを紹介するパンフレット作成プロジェクト、世界に一つだけのMy卓球ラケットづくりワークショップ、ミアキス文化祭やクリスマスパーティーの企画も生まれ、子供たちと共に確実に進化し続けています。

——現在、どれくらいの人数の中高生がここを訪れていますか。

登録数は950人、蕪崎市の中高生の3人に1人は来ていることになります。スタッフと一緒に卓球したり遊んだりしながら、自然と自分のくらしの話もします。私たちはなるべく子供たちの名前を呼び、話しかけます。それだけで子供たちの気持ちもずいぶん違うようです。それに最近、スタッフの一人が一週間、タイ旅行に行ってきました。その土産話を何気なく子どもたちに話してくれます。そんなことが自然にできていることが素晴らしい、大切です。私も今日、ここに出勤してくる前に、増富のとある競売物件を一軒落札してきました。なかなか得がたい経験です。競売物件って、どうやって生まれて、どんな人が買うのか？その仕組みが知りたいと思いませんか。私の父親は神奈川で高校の先生をしていたのですが、突然退職して、3階建てのドイツ建築の家をセルフビルドしてしまいました。水道や電気の工事もなぜかできるし、医療の知識についても、一般人とは思えないほど造詣が深い、不思議な人です。その父親の口癖が、「構造を見ろ」です。例えば、窓がガタついてうまく開かない、という現象があるとします。すると、構造そのものに、開きにくなった理由（ゴミが詰まっているとか、窓が歪んでいるとか）が必

ずあるから、それをよく見て考えろ、という話です。繰り返し言われたので、私も、モノだけでなく、社会の仕組みや金の流れなどの構造も気になり、何にでも興味を持つようになりました。そんな話も、子供たちとフラットに話します。

——まさに生きた学びですね。

大人の話って、社会の話って、面白い。極端に言えば、誰の話だって面白い。ここでは「大人図鑑」というコーナーを設けて、ゲスト（面白いことをしている地域の大人）に来ていただき、子供たちと話してもらっています。バーカウンター風の気取らない空間で、少人数で。子供たちはメディアを通じて、本当に色々な情報を知っています。しかし、これまで面白い大人と話すことの経験がなかった子が多く、少し話を聞いただけで、「もう知ってる」「面白くない」と断ってしまうことがあります。大人を評価してしまうのです。それは子供自身が普段から、常に評価にさらされているためかもしれません。しかしここに来て、生身の大人であるゲストと話していると、仕事の内容よりは、いかに生きてきたかについての話に流れていく傾向があります。ゲストの人生で、その窮地をどう乗り越えたのか、どうしてそのタイミングでその選択をしたのか、そんな話で盛り上がっています。そして、「そんな考え方が世の中にあるんだ」と感じ、「単純に生きてるってだけですごいんだな」と感じてくれたりします。



「身の周りの大人が人生つまらなそうに見えるから、大人になることに希望が持てない」と思う子供もたくさんいます。そんな子たちにも、わくわくしている大人を見てもらいたい。目の前の課題をどう解決するか、という宿題みたいな話より、こうなったらいいな、という未来にむけての夢のある話ができたら素晴らしいと思います。子供たちも「いろんな人会った方がいい」「いろんな経験をした方がいい」と普段からなんとなく皆思っています。この、ミアキスという、犯罪に巻き込まれたりする心配のない安全地帯で、子供たちが実社会を感じられる空間づくりをしたい。来月の梅雨の季節には、本を楽しむイベントなど、子供たちと地域の大人がここミアキスで出会って交流できるようなイベントも企画しています。しかしそれ

も、中高生のニーズにマッチしないと、興味を持ってもらえません。これはとても大切です。やはり子供たち自身が何を求めているのかを知り、子供たち自身が自分で学び進んでいくしかけを生み出していきたいです。

——いいですね。感心してしまう話ばかりです。今後、新たに取り組みたいことをお聞かせいただけますか。

色々ありますが、まずは子供たち一人ひとりに寄り添い、その都度展開していくことに、よいサポートをしていきたいです。子供の興味とやる気に伴走してくれる、地域の大人とのマッチングなど。私個人の気持ちを言えば、野外教育とか、宿泊型イベントとか、サマースクールとか、やりたいこともあります。そういうのはこちらが主催してしまうのではなく、自然に地域から立ち上がってくるのを待ちたい。地域みんなに、「ここに集う子供たちを育てたい」という気持ちが醸成されてくれば素敵です。現在、葦崎で起業しようとしている知人がいます。彼は「行きつけの田舎を作りたい都会の人」と「田舎の子供」をマッチングし、中高生と共に何かやりたい！と作戦中です。そういう事を考える人がもっともっと出てきてほしいと願っています。またここニコリには子育て支援施設もあります。そこからミアキスへ、もっと連携して、切れ目のない支援を続けていきたいです。

——最後に、山梨県地球温暖化防止活動を、ミアキスの中高校生に紹介してもらえるか確認したところイベントのチラシなどを紹介してくださるそうです。興味のある方は、山梨県地球温暖化防止活動推進センターまで、ぜひご連絡ください！

文；鈴木律子（推進員） 責；田村のり子

